

第2章 歴史変遷

(1)座談会 311+Rnet を振り返る～成立秘話～

2014年8月18日、本報告書作成にあたり、当時大学職員として関わった方や成立当初メンバーに集まっていたいただき、現役学生と座談会形式で成立秘話についてお話しいただいた。本節は、その記録をまとめたものである。

○座談会メンバー（順不同、*司会進行）

河村 優衣..... 元311+Rnet事務局メンバー、立命館大学法学部4回生

小林 政夫..... 元立命館大学サービスラーニングセンター主事

佐藤 敬二..... 元学生部部長、立命館大学法学部教授

清水 大地..... 元311+Rnet事務局メンバー、立命館大学文学部4回生

柳瀬 顕..... 元311+Rnet事務局メンバー、立命館大学卒業生

*山口 洋典..... 立命館災害復興支援室チーフディレクター、立命館大学共通教育推進機構准教授

○オブザーバー

二宮 絵美..... 元立命館大学共通教育課、立命館アジア太平洋大学アカデミック・オフィス

高橋 あゆみ.... 立命館大学サービスラーニングセンター主事

311+Rnet 成立にあたって

山口：このメンバーが一同に会することは初めてですが、何か懐かしい感じがします。唐突ですが、皆さん311+Rnetに関する一番古い記憶は何でしょうか。

佐藤：記憶を思い出して、私の覚えている限りでお話ししたいと思います。地震が起こった時、私は東京にいて安否確認を受けた側の人間でした。まさに会議をしている最中で、急いで机の下にもぐりました。その後、いわゆる「帰宅困難者」になりましたが、夜遅く新幹線が動いたので、夜中の12時ぐらいに京都に帰ることが出来ました。東京は現地ではありませんがそれでも大変な状況でした。しかし、京都駅から乗った京都のタクシーの運転手さんとの意識の違いは大きかったですね。京都は何もない平穏なところで全く震災のイメージがないんですよ。これは多分、活動していた皆さんがいつも思われることだと思いますけど、現地とそれ以外のところは意識ギャップみたいなものがありますよね。私はまず3月11日のその日にそれを感じました。

大学の動きについて喋らせていただきますね。大学は3月11日の翌日から毎日、大学の各部局の責任者が集まって情報交換を始めました。これが後の災害復興支援室へとつながっていきます。その議題は最初は安否確認が中心でしたが、その後研究部であれば復興用の防災缶を現地に送るとか、各部局が復興支援に動き始めましたので、その情報交換や調整の議題が多くなっていきました。学生部にも当然、学生から支援のために何かしたいのだけどうしたらいいんだろうという相談とか、ボランティアに行きたいという相談がたくさんありました。ところが、大学としては、最初の数日はボランティアに行かないようにと言っていました。ここまで露骨な言い方ではないんですけど.....

山口：少なくとも学生の思いを抑えてましたね。特に現地に向かいたいという思いを。

佐藤：そうですね、慎重にしろというような声明をホームページにも出していました。現地の状況が分からず、現地の受け入れ体制も整っていないので、ボランティアに行ってもかえって迷惑

になるかもしれないといったこともあって、最初は抑えていました。この考え方がいかどうかの評価は分かれると思うのですが、私個人の意見では、危険を分かった上で飛び込んでいくことは必要だろうと思うのですが、大学の立場としてはやはり学生の安心・安全がベースなので、そういう判断をしていました。ですが、それは最初の数日の話で、やっぱり学生からの問い合わせが強く、ボランティアなどの何かアクションを起こしたいと思いました。そのとき考えたのが2つあって、1つは大学主催で何かをやるということ。これは今もボランティアバスの運行などおこなっています。もう1つは学生が自主的に動くことをどうサポートできるのかということが課題になっていました。

この課題に対して大学の立場からいうとやはり安心、安全を考えたいと思っていたので、すでに現地で活動している学生達にどんな状況でどのようなやり方があり得るのかということをお話してもらおうじゃないかという話になりました。山口先生とか、当時のサービスラーニングセンターや学生部の先生方や職員の皆さんが集まってそんな話をしたというのが出発点だったと思います。最初の段階ではこんな方向性でということ余りイメージがなく、集まった学生の皆さんの話を聞いてみてということからスタートしました。そこに集まってきた学生たちが既にもうボランティアの経験を持っていた人たちで、それぞれのバックグラウンドがあったので、ボランティアサークルを立ち上げるような方向ではなく、やっぱりネットワークみたいな形の動きになったのかなと私は思っています。

山口：今日の座談会の鍵になる視点が幾つか出てきました。学生部長でおられたという立場もあって、濃密なお話でした。続いて、佐藤先生の次に濃い関わりを持った柳瀬くん、お願いします。

柳瀬：3.11当日、私は京都リサーチパークの町家スタジオというところにおいて、新しいメディアを使ってどう新しい社会をつくっていけるかというようなテーマでイベントをしていた時に震災がありました。その時の話のテーマに関連して、2011年2月のニュージーランドの地震でソーシャルメディアなどが、有効に活用された事例をシェアしていただきながら、今回の震災で、私たちは何ができるんだろうかということをお話していたのが、私の3.11当日でした。

山口：あの日は金曜日の午後でした。Twitterを活用して情報収集をしたのをよく覚えています。

柳瀬：その後、災害復興の研究をしていたなじみの人とともに、兵庫の被災地 NGO 協働センターセンターに行きました。その事務所のほうでお手伝いさせていただいたり、立命館で防災缶 iBousai のお手伝いをさせて頂いたりというのが最初の頃でした。

初期のフェーズでは結局東北には行かず、京都あたりのいろんな動きに応じて後方支援をしていました。その間、仲間と会って、どうにもこうにも状況がつかめない部分と、東北から帰ってきた、東京から帰ってきた仲間たちがものすごく混乱していて、みんな何かやりたいけど何をしたらいいのかかわからないという、通常じゃないような状態がちょうど3月中盤ぐらいにありました。その後、「大学でみんなできとれあえず集ってみようか」みたいなところが、311+Rnet の、ネットワーク組織の立ち上げにつながったのかなと思います。

山口：大学の「抑える」姿勢とも重なったのかもしれませんが、小林さん、いかがですか？

小林：僕は、実は最初のころ、あんまり関わられてないんですよね。当時 BKC のサービスラーニングセンターで働いていました。衣笠では学生の動きが出てきて、色々動いているという話を衣笠の主事から聞いていたので、BKC もきっとあるのだろうと思って探しました。でも余り見つからず、組織立ってやっている団体は募金活動をしている2団体ぐらいでした。なので、余り動きがないのかなと思って、ちょっと拍子抜けしたというのが最初の頃でしたね。

柳瀬：あともう1つ思い出しました。3月中盤に、京都や関西で、一度学生などの動きを取りまとめようという動きが実はあったんですよ。一元化したプラットフォームのようなものを作るから、学生団体や個人がむやみに東北に行ったり勝手に行動するのはやめてほしいと。僕はほとんど参加していなかったのですが、関西近辺の学生団体や個人が200団体近く参加していたようで

す。それが、思想信条の違い云々かんぬんみたいな形で、確か2週間ぐらいで崩壊したんですね。ああこれはまずいなと。立命にも色々やっている子たちが大勢いて、やりたいと言っている学生もたくさんいるのに情報共有できる場もないし、とりあえず共有できる場所をつくろうと思いました。福島に入られた方の報告会を撮影したものをみんなで見ながら座談会を企画したのが、立命館と初めて関わらせて頂いた時だと思います。そのあと何度かこうした機会をもったのですが、それが設立のきっかけになったんですかね。

小林：衣笠ですごく熱い学生たちが集まっているらしいという話は BKC にも聞こえてました。やっぱり頑張ってる学生はいて、集まろうとしているんだと感じましたね。

柳瀬：この時にちょうど河村さんや、栗田さんが関わってきました。栗田さんは山形出身ですが、震災のときは海外にいて、ほとんど帰ることができず立命に来てしまっ、すごく悶々としていました。東京で被災した子もかなり集まったというのがこの時だったかと思います。

山口：ちなみに過去の資料から時系列で追っていくと、3月15日に大学が「東北地方太平洋沖地震への災害救援活動を考えているみなさんへ」を発表しました。そして、4月6日の前期セメスター開講までの時限組織として、愛称を311+Rnetとする「立命館大学震災復興支援活動情報ネットワーク」を立ち上げよう、という話になりました。教職員と有志の学生の共同体として、です。それで、311+Rnetは現地に行けない学生らの後方支援の活動母体となり、卒業式と入学式の募金活動などを行いました。3月15日の文書では勝手に募金活動するなと示したこともあり、大学内に複数の団体や個人のネットワーク組織としての活動を提案し、呼びかけを重ねて行くこととしました。もちろん、前期セメスターが始まっても事態は落ち着かず、むしろ現地の事態は深刻さを増していったように思えました。そこで、4月14日に311+Rnetの名前で「東日本大震災被災地でのボランティア活動について」という文書が大学のホームページで発表され、立命館からの支援のターニングポイントを迎えることになりました。抑える段階から妨げないというモードに変わったんです。要するに、抑えるというのは端的な言葉で言うて行くなですけども、行くなら行けば変わったんですね。

ちょうど立命館では2020年までの学園ビジョンを策定しているところでした。未曾有の災害とも呼ばれたこともあり、2015年までの前半期計画の補正版において、5つめの柱として「東日本大震災を受けた学園の基本計画」が掲げられることになりました。そうした議論の経過もあって、4月21日に立命館災害復興支援室が設置されました。こうなると、後方支援も続けつつ、直接的な支援活動を妨げないどころか促すようになりました。

こうして時系列で振り返ると、佐藤先生も触れた初動期について、状況が分からない中で迷惑になるから行くな、行かせない、という判断は大組織ゆえの秩序を大事にした判断としては妥当な選択肢だったのでしょうか。ただ、今だから言えることですが、「行かなくてもできることはある」と言っても、いてもたってもいられずに勝手に行く学生はいるだろうと思っていました。行くなと言われて行かないというのは、相手を見て判断していない証拠だと考えているためです。もし困っている人がいて、一緒に行きたいという人がいるなら、どうやったら行けるかを考えればいいはずが、そうはならず、人やまちに丁寧に向き合うモードにはならなかったんですね。

今回、大規模・広域・複合型の災害に対し、被害の全容が分からない中、今行っても迷惑になるんじゃないかと、支援を抑える声が多くの中で生まれたことが大きな特徴でした。それゆえ立命館大学でも、現場のニーズに応えるために人や物やお金といった活動資源をコーディネートする中間支援組織を立ち上げ、ボランティアが活動できるようにするという手段が講じられることになりました。もっと言えば、既存の組織が直接的な支援モードに変わるのではなく、支援したい

2011年4月頃のミーティングの様子



人の受け皿として新しい組織が立ち上げられることになりました。

このように、東日本大震災では「直接的な支援をしない正当性」が高まったという特徴とあわせて、もう一つ、SNSがある程度機能したことを挙げることができます。先程も Twitter のことに触れましたが、この「ある程度」というところがポイントです。一人ひとりの命を救うところまで機能した Twitter ですが、支援したい人の思いを束ねていくには人が組織化をしていかなければなりません。インターネットは宇宙からでもアクセスができるものですが、個々の情報はマイクロであり個別性が高いものです。しかし、自らのタイムラインに、そうした実に細かく具体的な各所の情報が並ぶことで、あたかも自分がコントロールルームにいるような感覚に浸り、支援しているような感じになってしまうのではないのでしょうか。つまり、細かな情報を知っていれば、知った情報を誰かに伝えていくなどしていれば、自分はささやかだけど現場の何かに関わっている、そうした態度の表明になっている、支援できていると捉えてしまうのではないかと、いうことです。このようなツールの進化が、逆に情報収集や共有を通じて具体的なアクションが新たに起きるきっかけになりにくくさせたのではないかと、いう気がしています。だからこそ立命館大学では教職員中心に 311+Rnet の立ち上げの構想を考えたんですが、そもそもの制度設計からもっと学生が関わっていれば、もっとやりたいことができるようになったと確信しています。最初の枠組みが、すべきことだけを考えて、そして現場の動きを抑える中でつくられたことが、最後まで尾を引いたのではないかと、そう評価しています。

設立のエピソード、初期の活動について、当時の状況に照らして少し言葉を添えました。今一度進行役の立場に戻り、皆さんが何か思い出した点、「そういえば…」といったお話を伺わせてください。

小林: そういえば、ですね、「すごく活動してます」と言う学生に出会ったことがあって、何してると具体的に聞いたら「昨日、1 日中 Twitter で情報の交通整理してました」というのを聞きました。これは活動なのかな、少なくともその分にかかるエネルギーとか時間を何か他にかければいいのと思うことは多々ありましたね。何か仕組みがないと動けない、仕組みに乗ろうとする学生たち。もっとこう、ほっとけないからやる、というボランティアの原点みたいなものが余りなかったなと感じますね。ほっとけないから行くなと言っても行く学生がいたりとか、そういうことがなかったと思います。その辺はやっぱりジレンマですよ、サービスラーニングセンター職員としては。やればやるほど学生の主体性を奪ってはいないかという。

佐藤: 私はむしろ SNS の話でいうと、今回、立ち上げる際に思ったのは、データ処理とか後方支援とか、こんなことが広くやられているんだというのがむしろ新鮮だったんです。復興支援だと現地に行って、最初、泥かきからやるというイメージが強かったんで、東京でいろいろ拠点を置いて支援するみたいな動きが大分ありましたけど。

山口: 確かに膨大なマイクロ情報の交通整理は後方支援の新しいスタイルの一つでしょう。しかし、それを同時に皆がやっていると、交通整理までマイクロになってしまうわけです。今となれば、その時間ももったいなかったなどと言えるでしょう。とはいえ、それだけ必死だったんですよ。その例に漏れず、311+Rnet も Twitter と Facebook を回し、大学のドメイン内に公式ウェブサイトもつくりました。しかし、セキュリティの仕様でウェブサイトは学生がログインして更新することはできず、結果として最新の情報は Twitter と Facebook に載り、マイクロな情報として細分化されていく、という結果になりました。管理する側も運営する側も、もしかしたら利用する側も、ホームページは何のためにあるんだ、と感じたのではないのでしょうか。

今、インターネットの活用の部分でネガティブな発言を重ねてしまいましたが、311+Rnet の基本は人と活動のネットワークでした。基本はアクティブでポジティブに支援していくための、知恵や経験の相乗効果を狙っていました。何かこんなことができたとか、こんなことが波及効果として生まれたなどの実感がある方はいますか？

柳瀬：そうですね、集まってよかったなって思う瞬間というのは幾つかありました。4月ごろに、ミーティングが終わった後にみんなで大学近くの「なか卯」に御飯を食べに行き、その後、夜中3時ぐらいまで10名ぐらいで語り尽くした時がありました。先ほど佐藤先生もおっしゃっていた、東京と関西とそして東北との温度差をテーマにそれぞれの3.11当時の経験を話しました。海外を含め、それぞれの地域で向き合った3.11で突きつけられたものが人それぞれかなり違って、ひとりひとりが3.11で何を体験してどういうことでショックを受けて今立ち直れないでいるのかというのが、その日に大分共有されたというのではありません。

3月、4月のフェーズって東北に行こうと思っても大分大変だったところがありますよね。東京までだったら新幹線に乗ればすぐに行けるんですけど、関西から東北まで行くのに10時間ちょい、バスで揺られて、その後2、3日活動して、車中泊してそのまま帰ってくるかとなると、やっぱり尻込みしちゃう人も多かったですし、実際バスもほとんどなかったですし、かといって電車がちゃんと走っている時もあればみたいな感じもあったので、やっぱり関西と東北という距離的なものというのはやっぱり大きかったのかと。700キロ、800キロというのはやっぱり大きいなということを感じました。

その一方で関西からすぐに行けた人というのは、もともと何らかのつながりで、復興支援のルートが既にできていた、あるいは、つくりやすい、つながりやすい状況・環境にいた、そういう人たちが真っ先に行けたのかなと思ってます。復興支援のiBOUSAI「防災缶」のときも、防災系の研究者や学生の方たちが、たくさん来ていましたし、何か近くで動きがあるときには人が集まっていたのかなという気はします。

山口：そうした役割は、平時には、ボランティアセンターが母体となって2008年に設置されたサービスラーニングセンターが果たすものですが、小林さんは何かエピソードがありませんか？ポジティブ、アクティブな人たちと関わる機会も多かったのではないのでしょうか。

小林：いい話というほどではないけど、僕の中の気持ちの動きの話。4月1日に衣笠に異動してきて、学生がブレーキもかかっているんだけど、すごく熱い思いは昔と変わらずあるんだなと感じていました。311+Rnetをベースにしながら、僕はこの学生たちと一緒にやっていくんだろうという思いを高めていたのが4月前半だったんですね。ところが、災害復興支援室ができるという話が聞こえてきた。そっちのほうにいろんな学生の支援も含めて移管されていくだろうと僕は思ったわけですね。ところがそうではないと、大学の教職員の動きのほうは災害復興支援室が中心にやりながら、でも学生の実質的な動きを支援する仕組みとして311+Rnetは残そうという話になっていった。それは今考えてもよかったなと思います。もちろん、災害復興支援室に一元化したよさもあったんでしょうけれども、単純に遠いんですよ。朱雀キャンパスに支援室があって、衣笠やBKCにいる学生を支援する、やっぱり難しいと思います。単純に学生がいていいんだよという場所が衣笠にもBKCにも残ったというのが、今になって思えば、それが後にエネルギーになっていきました。

山口：冒頭で佐藤先生がおっしゃられた、大学主導で何かをすることと学生の自主的な動きを支えること、この2つの軸は交わらない可能性があります。もちろん、大学が自主活動を支援するわけですから、入れ子の構造にはなってしまいます。ただ、大学の動きと学生の動きとでは視点が違ってくるはず。だから、丸をどう二重丸にするか、その観点が重要となってきます。支援とはマイナスをプラスにする、0を1にする、そういったことだけではありません。1を2にする、あるいは2を6にする、こうして出来ていることを続ける、良い点を伸ばす、そうした発想で活動が始まり、続き、きちんと止められる、それが大事です。問題点や改善点ばかりに関心が向くように導いていくと、時に「自主活動をさせる」という論理矛盾が起きることがあります。主体性は駆り立てるものだけではなく、主体性が引き立つ土壌づくりが大切なのですが、どうしても熱意の差などが明らかになると、どこかで誰かが誰かに何かを「させる」構図が出来上

がってしまいます。先程はそれを秩序という言葉を使って問題提起をしたつもりです。ただ、こうして大きな流れを生み出そうとする中でも、細かな動きが立ち上がり、それが311+Rnetの団体構成員として積極的に参加してくれたのは、大きな成果の一つでしょう。

柳瀬：3月のフェーズと4月の前半のフェーズ、余り動きがなかったというか大学が休みだったのでみんな会う機会自体が余りなかったんですけど、4月以降、「復興につなげるために僕たちもこんなことができたらいね」みたいな話は、ちらほらあったんですね。その中で一番やっぱり特徴的だったのは、チャリティーかき氷のらくださん。メインになってた子たちがみんな就活生でした。就活生だったんだけど、やっぱりこういう震災があった中で何かできないかなみたいな話をして、最終的に彼らはかき氷になったわけなんです。10万円ちょっと売り上げましたね、売り上げて、実際に向こうでもかき氷つくられてみたいなこともされてました。

山口：ゆっくりとした歩みで砂漠に行くキャラバン隊という物語からの命名でしたね。かき氷販売と並行して、関西に県外避難されている方の学習支援などにも取り組んでいました。

柳瀬：そうでしたね。そして、彼らは本当にゼロベースから始まったんですね。たしか、メンバーの方たちもボランティアとか、そうしたことに関わっていた経験はほとんどなかったと話していたと思います。その子たちが、「やっぱり何かできないか」ということで、マーケティング的に調べたら、かき氷が利益率がいいということに気がついて、それで結局彼らはかき氷をやって、その収益の全てを支援に使っていました。彼ら、実はここだけじゃなくて新大宮商店街のお祭や宇多野ユースホステルでのイベントなどにも出張していて、新聞を出したりと、幾つか他の活動もされてました。そういう「小さな活動でもいいから、自分たちで何かしなきゃいけないよね」と言ってやっていくというのが、大学の中じゃなく、大学外でも同時多発的に起こっていったというのが、4月以降に増えていったイメージがあります。

チャリティーかき氷らくだの活動の様子



小林：これを最初にやった学生は、かき氷のアイデアはずっと前からあったらしいです。ただ、単純にもうかると。これは商売としてうまくいくだらうから、いつかやろうと思っていたらしい。それを実現する前に震災が起こったから、その仕組みを使ったら東北に寄付できるなどと考えてやったのがらくだなんです。

ただ、これが本当悩ましくて、最初はサービスラーニングセンターに大学の中でできないかという相談をしていたんですね。で、学生部とも相談をしていたと思うんですけども、大学の中ではちょっと厳しいということになったそうです。

佐藤：多分、衛生上で、火が入ってないということが問題あったんだと思います。

小林：結局、彼らは自分たちで、大学の外に場所を借りてやり始めました。311+Rnetとして宣伝ぐらいは手伝いましたけれども、それだけです。けど彼らは大学の使えるところは使って、たまにイベントで大学の中でもやったりもしていました。そういうふうにして大学とつき合うときはうまくつき合って、でも大学が絡むとかえって面倒だということは自分たちで勝手にやっていました。

柳瀬：あと、組織的には311+Rnetのほかに、大学間で連携して復興につなげていこうという「エンカレッジ」という動きもあったような気がします。けれど、大学同士で連携しようという動きだったりとか、あるいは学生団体同士で東北と連携しようというような、団体間での連携の動きは、距離的に離れすぎていることもあって、ほとんどうまくいかなかったような気がするんです。ただ、個人ベースでつながりをつくって、それで東北学院大学とSkypeでつないだりだったりとか、渥美くんが向こうでインタビューして、それを何かの場所でアート作品みたいな形で提示し

たりだったりとか、個人ベースのつながりつながりというのは、実はいろんなところで生きてはいて、初期の段階では人と人とのつながりみたいな部分というのが、なかなか連絡するのも大変なんですけれども、弱いながらにもきちんとながらつながっていて、実はすごく有効だったなというのは感じたところでした。

山口：東日本大震災と阪神・淡路大震災とを比べると、まずは被災3県と言われるように広域災害という点が最も大きい違いです。当然、大規模な災害であるという点では参考になることも多いでしょう。ただ、地震と津波と原子力災害、その他液状化など、複合型の災害となったために、単純比較が難しい要因となりました。それもあって、東北の支援は総合化しなければと考える人が多かったのかもしれませんが。つまり「これもできてないじゃないか！」と言う人が増えれば増えるほど、重箱の隅をつついていく感じになっていきます。だから、何かに特化する、例えばかき氷を売ると、非常にわかりやすく、結果として活動を始めやすく、続けやすく、止めやすいものとなるでしょう。しかも、その結果をどう活かすかは後で考えようと言いやすいでしょう。しかし「東北を支援をします」となると、なかなか簡単にはいきません。「まずはみんなで支援をしよう」、「団体をつくろう」などとなると、「代表はどうする？」と誰かが問い、それに「代表とかはいいからみんなで考えましょう」という流れが生まれることがあります。この「みんなで」というのが厄介なんです。みんなで考えるという名のもとに誰も決めない、でも議論だけは深まってきて、もう時間が次バイトがあるのでというのでまた去って行って、中途半端なまま終わる。じゃ、また今度 Skype でやろうという具合に、当面の動きが先送りされます。これら便利そうなツールは、時に相手の存在を見えなくさせてしまいます。決めつけはできませんが、大学同士の連携がうまくいかないことも、ツール重視の落とし穴にはまったのではないのでしょうか。何かしていることやアクティブであるという自分の状況に満足する、言い換えれば結果に満足せず状況に満足してまったのではないかと。またネガティブな話になってしまいましたが、直面した困難、問題に対して、これが成果だと言える方はいらっしゃいますか？

佐藤：個別のいろんな動きをここの Facebook などのところで寄せ集めて、動きをちゃんと形にしたというか、表に出したということは最初の成果だと思います。

小林：まあ、組織として何ができたと言われるとちょっとつらいんですけども、何かしたいと思っている学生に場所を提供するとか、ちょっと後押しをするだけで実現するみたいなことは結構あったんじゃないかなと思っています。僕、思い出したのは「ミートソース」という団体があって、最初、代表の学生が動画をつくって流すか何か、そんな取り組みをすると聞きました。けど、言っちゃ何ですけどだめなんですよね。思いだけはしっかりあるけど、それを伝えるための仕掛けが考えられていない。そこで、柳瀬くんや 311+Rnet で中核にいた学生がこうやったらいいとアドバイスして、団体名も後から決まったんですよ、団体名がないと宣伝できないじゃないかと言ってね。そんなのって 311+Rnet があったからこそで、多分それがなかったら彼は 1 人でやって、それこそ場所のとり方もわからなくて、エネルギーを使って終わってしまったと思うんです。311+Rnet という仕組みがあったことで、こうやって場所とったらいいんだとか、こういうふうにやっていったらいいんだということが分かって、実現までいったということが他にもいっぱいありました。本当に 1 年目というのは山ほどイベントをやっている、311+Rnet があったから、人と人がつながったからできたことは多かったなと思います。

山口：個人名は差し控えますが、その後、彼は私の講義していて、最終レポートにそうしたことを自分の言葉で記していました。今でこそ気付いているようですが、多分当時はうまく言葉に出来ず、しかし何かしたいという思いは確かにあり、もやもやが募ったでしょうね。

柳瀬：みんなももやもやしていましたね、この時は。もやもやしてる段階でいろんな情報が入ってきていました。その時、やっぱり現地にさっさと行って、そこで常駐なり何なりして、ちょっとコーディネートできる人間が 1 人いるだけで全然違ってたなと思います。

山口：311+Rnet は後方支援という枠組みと名前にこだわって活動していました。行かなくてもできることがある、これはもちろん間違っていない。しかし、それが自らを縛る制約条件となり、理念に対する価値や意味の追求がしきれなかったのではないかと感じる時がありました。

柳瀬：こだわっていたわけでは全然ないんですけども、現実問題として4月から大学が始まってしまっていて行けなかったというのが、まず第一にあるのかなという部分は大きかったかなと思います。

山口：実は現地と事務局の温度差の問題は、阪神・淡路大震災の際の「立命館大学ボランティア情報交流センター」でも明らかとなった問題で、後に立命館大学が放送局が二つの立場の葛藤を映像作品としてまとめています。嫌な言い方をすると、後方支援のこだわりは、現地に行かないことを合理化、正当化するロジックにも受けとめられます。これは教職員側が現地に行くことを「抑える」時期には、実に都合良く位置づけられます。しかし、現地に行くなというメッセージではないはずで、現場で支援活動にあたる人たちとの温度差を生みます。

柳瀬：そうですね。ただ、行ってた子は多かったし、個人だったりとか団体としては行って、4月、5月になってくると復興支援バスだったりとかも出てきていました。僕らはバスを出す手段も何もないし、その時点での学生の制約条件からすると、つなぐことというのがまず優先的に求められたみたいな部分というのはあるのかなとは思いますが。

小林：改めて考えてみると、ちょっとだけ関わっていた学生は別として、中心になってやっていた学生は現地へ行った学生がほとんどなんですよ。行って感じたことをこっちでも実現したい。で、こっちでできることを考えてやったというパターンは結構あると。そのときには 311+Rnet というものが便利な道具になったのかなとは思いますが。

高橋：今後、例えば南海トラフが起こると言われている中で、また同じような学生の動きがあるのではと思っていますが、学生だけの組織の方がよいのか、どういう形が本当はよいのかが、まだ自分の中で答えが見つからず分らないです。今後も東日本大震災のような大きな災害が起こった時に、どうすればよいのかを職員の立場からの思いや、学生の思い、またもっとうちがかった等、当時の学生に携わっていた方々に振り返ってみて本当はどうだったのかをお聞きしてみたいです。

山口：では、時間をぐっと現在に引き寄せましょう。特に清水くん、河村さん、いかがですか？

Rnet の活動を振り返って

清水：さっきちょうどおっしゃられた、行かない理由を合理化するということに関連して、ちょうど1コ下、2コ下の311+Rnet 事務局メンバーは実は全然行ってない子たちばかりだったんですね。本当に最後活動終了する直前にやっと東北に行ったぐらいで、やっぱり現地を知らない、行ったことがないという点で現地のニーズを分かっていたり、モチベーションの差であったりしたと思います。僕らが学園祭でこういうのやろうと言ったら言われたことはするんですが、自分から何かをやろうともしないし、自分で情報を集めたり発信することもしないというところで、だんだんと代がかわるにつれてその子たちのモチベーションが下がってきて、人が減って行って311+Rnet の活動が終了することの原因の1つになったのかなというのは僕自身は感じてますね。

河村：311+Rnet としての活動の意味が見出せなくなったというのが一番大きいのかなと私は思っています。大学側からも「今までのような大学側の支援の形は終了にする」という話をされたりとか。あとは、今、清水くんが言ってくれたみたいに、メンバーの中での意識というのも変わってきたりと、本当にこの状態で存続していく意味があるのかというところを確認した上での終了という決断を出しました。

山口：案外難しいんですね。対外的な文書には当初の役割を終えて、などと書かれるのですが、

当初の役割が何でどう終えたのでしょうか。役割を終えたというとき、果たせないから終わる場合と達成したから終わる場合の両方があります。今の話、清水くん、河村さんの話でいうと、このままやっていっても当初の目的を達成し得ないから役割を終え、幕を引くという決断に同意するということだと思うんです。終了に寄せての思い、それぞれいかがでしょうか。

柳瀬：最初、津波にさらわれてしまってそこからフェーズからどんどん復興も進んでいってフェーズって変わってきたのかなというのは思っています。ある意味では自然な動きの一つなのかなとは個人的には思います。

小林：僕自身すごく反省があるんですね。僕が2年間かかわった中で、最初の1年は比較的上手くいったのではないかなと思っていて、とにかくいろんな学生がやってきてこれをしたいと要望がありました。それを、じゃあこうやってできるよと言ってやるだけで、ぼんぼんぼんと後押しするだけでいろんな活動が生まれていました。成果を問われるとちょっと怪しいですけども、少なくとも学生がやりたいと言ったことを形にするお手伝いはできたかなと思っています。

ただそこからモードチェンジしないといけなかった。震災から1年ぐらい経つてくるとだんだん何をしていいかみんな分からない状態になってくるわけですね。だから学生が来るのを待っていても誰も来なくなる。そこで、我々は何のために、具体的に何をするのかをもう一回しっかり考え直す、そういうモードチェンジをするべきでした。震災直後のモードでずっと2年目もやっていって、うまくいかなかったことが反省としてありますね。けれど、本当に3年間よく続いたなと思います。さっき話も出ましたけれども、いろんな学生のネットワークが山ほど出てきて、ほとんどすぐなくなりましたよね。そんな中で3年間続いた理由は何だろうと考えると、事務局がしっかりしていたというのが大きかったと思います。実際にネットワークを継続していくための要は事務局ですね。例えば会議の日程を調整するとか、書類をつくって記録をまとめていくとか、そういう地味な作業をしてくれる学生がいたのは大きかった。だから3年続いたし、それなりの成果もあり、価値を生み出せたのかなとは思っています。

だから今後こうしたネットワーク団体をつくるのなら、事務局がしっかりした組織をつくるのが大切ですし、そうなってくると311+Rnetの学生と教職員と一緒にやる仕組みはよかったんじゃないかなと思っています。なかなか学生だけで事務局として維持するのは難しく、教職員が関わっていたから安定してできる部分もあるし、学生だからできる部分もある。それぞれの強みを比較的にうまく発揮できた仕組みであったのかなとは思っています。

山口：話し過ぎる進行役で恥ずかしいのですが、私も少しだけコメントさせていただくと、311+Rnetの活動終了は、希望していたことが通らずやめるという背景があるように思うんです。最初は緊急時ということもあって、とにかく何かすることが大事であり、出入り自由なコミュニティが必要でした。入りが多から出も多いのですが、それが活動へのダイナミクスとなって、組織に広がりをもたらされました。しかし、だんだん落ちついてきたら出入り不自由な環境が必然となります。単にノリで関わるだけでは支援にならないからです。それが組織化という言葉に置き換えられます。私は神戸での活動を経て社会心理学に専門を変えたので、柳瀬くん「最低限のルールはつくろう」とよく言いました。「何をしたらあかんのか」を決めよう、と。ミーティングを無断欠席しないとか、定例ミーティングの開催通知や議題整理や議事録共有の方法など、ちゃんと決めておいたら、罰則じゃなく自分たちが大事にすべき価値として組織として大事にする価値、コアバリューとなるよ、といった話をしたことをよく覚えています。

もう一つ、役職と役割を混同しないでねと何度も言いました。学生団体だけでなく組織に共通する点ですが、どうしても「代表」など役職名にこだわるんです。そういうふうな役職にこだわっ

定例ミーティングの様子



て誰かに役を振っていくと、結局その役職が何か分かっていない中でとりあえずやる、といった前提で組織が動くこととなります。組織化というのはどこかで機能分化させていくことなのですが、ただ役職名を誰かに与えただけでは、何をしていたらいいのか、うまく動けない時に何が困るのが分からぬままに時間が流れていくわけです。役職がどうじゃなくて、一人一人に何ができるのか、全体の動きで何が求められるのか、全員が同じ役回りではなく、どんな役割が必要なのか、これが役職と役割を区別するという事です。しかし、なかなかそうもいかず「みんな」でといった漫然としたルールのもとで動くことになり、端から見て組織化できずじまいでした。

今後こうしたネットワークをつくらせたら

柳瀬：終了について、何ができたのかと言われると自分自身も苦しいところではありますし、「もっとこうできたんじゃないか」というのはすごくあります。今後、南海トラフや首都圏直下型地震など、起こるであろうと言われていて、そうした大地震よりも前に、今も毎年毎年大雨で関西各地でもとんでもないことになっていて、こうした部分も、どう支援できるか、立命館はどうするのかみたいなどころも含めて考えていかないといけないなと思います。

災害が起きると、交通機関等も全部とまってしまってもみんな動けなくなる、という状態に現実問題として、支援をどうするかということと共に自分たちもどうするんだということも一人一人が考えていく必要があるのかなと思いました。

南海トラフなどの大災害に関しては、どう支援体制をつくっていったらいいのかというのはもちろんあると思うんですけども、もう既に研究室や他の活動などで地域同士でかかわりがあると思っています。地域のつながりを一から構築しようと思うと大変なわけですけども、もともとつながりがある部分に関しては公的なものと違って割と入りやすかったりすると思うんです。何か起きた時、現地の人達、団体が中心となってやっていると思うので、そういうところにアクセスしながら一緒にやっていけるかという部分というのは、実はそれまでにその地域とかかわってきたかが大きいと思います。立命館は様々な地域と関わりを持っている人が多いと思うので、そういうつながりを大事にするべきだと思います。

今後つくるのであれば、そうしたつながりを生かし、仕組み化しながら、支援を行えるようなことが出来るといいのではないかなと思っています。

佐藤：大学の立場でいうと、学生部はボランティアなり、東北への支援なりのような、正課にとどまらない、あるいは正課から派生した自主的な学びを援助する枠組みを作るべきだと考えていました。そのため、育英型の奨学金や助成金の制度を立ち上げたばかりでしたが、震災被害への様々な支援もこの制度を利用した取り組みが多くみられることになりました。311+Rnetの活動は、学生部の考えていたこのような枠組みの典型例だったかなというふうに思っています。

この311+Rnetの今後に関して言うと、学生の横のつながり、どんなテーマでもいいので、それぞれ元気にやりたいと思っている人たちが横につながれる場だけでもあった方がいいんじゃないかなという思いは持っています。それが即、次の南海トラフのところに反映するかどうかはわかりませんが。学生部で見ている元気な学生はたくさんいて、育英型の奨学金や助成金を出している学生たちに1年終わった後、プレゼンテーションをしてもらっているのですが、非常に多様なそして多面的に学んでいることを話してくれるんですよ。けれど、こういうふうな活動をして頑張っている学生がいるんだということを他の人（学生も教職員も）が知らないという、それがもったいないなというふうに思っています。これだけの大学でこれだけの学生がいてこれだけいろんな動きをやっている、それがお互いに見えればいいなという願望はあります。

山口：今後のネットワーク団体をつくらせたら、あるいは南海トラフでの活動を想定するならば、一番大事なのはオフィシャルな機関の存在でしょう。たとえ一時的な組織であっても、公式の窓口があることは、外部から立命館を頼りたい、立命館を支援したい、そうしたときに断らなくて

済む可能性が高くなるからです。だからこそ、発災時のために平時から多様な立場の人々が一緒に考えることが必要でしょう。実際、東日本大震災の発災当初、部署や関心を越えて一緒に考える人が集いました。その時に体制や予算があるかないかではなく、支援を求める呼びかけに応え続けていくためには、日頃からある程度の準備と余裕を持っていくことが必要です。それがあって、緊急時に物事の優先順位を調整しつつ、他者の思いを受けとめ、共に考える場をきちんと生み出し続けることができるでしょう。南海トラフが動いたときは私たちが被災者になる可能性が高いわけです。まず手の届く範囲でどう身を守るかも大事なんですが、それ以上に東日本大震災の支援を通じて「お世話になったから恩返しを」というような声や、「あのときは立命館が頑張っていた」と思いを寄せてくださる人たちの気持ちをきちんと受けとめる「受援力」が求められます。そのためのオフィシャルな窓口機能をどう整えられるか、常に考えていきたいですね。

次の世代へバトンを託す

小林：立命館、大学の中では結構元気な学生が多い大学だと思っていますけれども、僕はその中でも特に元気な学生を相手にする仕事だったんですね。

でもその先に見ていた学生はそうではない。むしろ本当に元気な学生は勝手にやるんですよ。そうじゃない学生がいかに動ける仕組みをつくるかというのが 311+Rnet の一つの課題だったと思います。それはみんな一つにというだけじゃなくて、元気な学生は元気な学生、普通の学生は普通の学生の役割があって、それで活動を進めていけたらなと思います。僕も立命を退職して物理的には離れていても、どこかでつながっている感覚はあって、僕にできる役割を担っていきなと思っていますので、これからもよろしくお願いします。

柳瀬：今言えるのは、やっぱり「現場主義第一であるべきだ」というのがベースとしてあります。現地の人と2、3日一緒にいるようなことがあるだけで全然違っただろうなというのがこの震災支援で外部とのネットワーク組織が最初の段階でつくれなかったことに対する一番の後悔です。

「今後こうしたネットワーク団体をつくるとしたら、あるいは、震災対策として、どことどこの地域が、どのように地域連携をとりながらやっていくのか」ということに関しては、まだモデルのようなものがきちんと示されてはいないと思うので、そのこと自体は、自分の危機意識、問題意識としてあります。

また、その一方でそれぞれの地域が自分たちでやっていけるような方策を模索していくべきだと思うし、そういう小さな地域主義プラス外からの人たちとの連携の上で何か減災なり防災なり、これからのまちづくりをやっていけるのではないかというのを3.11から3年ちょっとたった東北の動きを見ながら、思っています。

小林：SNS が普及した時代だから情報はとれるんですよね、現地に行かなくても、人に会わなくても、書類は書けるんですよ。ただそれだけでは足りなくて、やっぱり現地に行って人に会わないと感覚が起動しないんですよね。実際に現地に行けるかと言われたら難しいのですが、やっぱり行かなきゃならんなと強く感じています。

もう一つだけすみません。阪神・淡路大震災の時に学生だった人たちというのは今30代後半ぐらいなんですけれども、現在NPO業界とかで若手のリーダーとして活躍している人が多い。山口先生も実はその一人ですよね。同じように東日本大震災のときに学生だった世代がNPOのリーダーになる、あるいは別の活躍の仕方、日本を引っ張っていく世代になるんだろうと期待しています。

山口：長時間にわたって秘話を語っていただきました。ありがとうございました。